
その後のお話～一刀、彼の場合～

ドカン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その後のお話〜一刀、彼の場合〜

【Nコード】

N1343P

【作者名】

ドカン

【あらすじ】

物語の最後。彼が紡いできた物語の終焉とは一体・・・

(前書き)

最後の恋姫です。稚拙な文章ですが読んで頂けると嬉しいです。

今年も桜の花が咲く。艶やかな色で、でもどこか儂げな色で。たとえ散りゆく運命にあらうとも桜の花は咲き続ける。桜の命が尽きるその瞬間まで。

今夜も夜空には月が昇る。無機質な明かりで私たちを照らしている。だが時として、その光は我々を包み込むような優しい光にもなる。太陽にも負けない、温かな光に。

今日も大河は流れ続けている。晴れの日でも、雨の日でも。いつでもどんなときでも、その流れを止めることはしない。ただ淡々と流れ続けている。まるで、人の歩みのように。

どんな物語にも始まりがあり、そして終わりがある。終わりが無い物語など一つもなく、そこに例外はない。終わりがあって初めて物語は物語になるのである。

御伽噺の最後。物語が、物語たるための物語。

誰も知らない、でも受け継がれてきた最後のお話。

今年も春が来たか。ベットに横たわり、外にある桜の木を見ながら彼は1人思った。

毎年春に咲き誇っていた桜の花が咲いたのだ。いつもならもう少し遅い時期に咲くはずだが今年は冬が暖かったせいかな時期が少し早まったようだ。

「今年も見事なくらい咲き誇っているな」

ベットに横たわり彼はぼつりと呟いた。

しわだらけの顔で、白髪の間、細い手足。昔、戦場で鍛えた体は見る影もない。見ての通り彼は老いている。半世紀以上前の若く凛々しい姿はどこにもない。そこにあるのは人生の終焉を待つ1人の老人の姿である。既に人生の大部分は終了している身。最近では体も満足に動かなくなってきたいて一日の大半をベットの上で過ごすようになっていた。

「年をとってしまつたものだな」

桜の木を見ながら彼は言った。数年前から動かなくなり始めた体。今では、造つてもらつた車イスでの移動がもつぱらになっている。歩けないわけではなかったが歩くのがつらいと感じてしまうのだ。その度に彼は自分が老いたことを実感していた。

王として、およそ半世紀以上に渡つてこの国を治めてきた。その治世は正に名君と呼ぶにふさわしい。だが、彼がそれを鼻にかけることは全くと言っていいほどない。それは、彼自身1人でこの国を治めてきたわけではないことを重々承知していたからなのだろう。1人では何もできない。そのことを彼は知っていた。

このまま彼の治世が続くのだろう、人々は揃つて口にしていた。今までにない名君でいらつしやられる、あの方が死ぬまでは安心だ、さすが天の御使い様だと。民衆の期待は彼の実績が大きくなるのと比例して大きくなっていった。もちろん、彼もそんな民の期待を裏切ることはできない。名君でいようと自分を奮い立たせ、国の頂点としてあり続けた。しかし、ある年彼は突然隠居を宣言し舞台から姿を消してしまつた。それは今からおよそ10年ほど前。秋の収穫が終わりこれから厳しい冬に向かおうとする季節であった。何の前触れもなく隠居すると言いだした一刃。国の運営は全て子孫に託すと言つたのである。

「どういうことですか!？」

突然の隠居宣言に当の子供たちや孫たちは困惑していた。確かに

今、政務の大部分は彼や彼女達の祖母から受け継ぎ自分達が行っている。だが、最終的な判断は全て父、祖父である彼に任せているのだ。その彼がいきなり隠居なんて言い出すものだから困惑するのも当然だった。亡くなるまでいてくれるはずの存在がいきなり消えてなくなった。

「父上、一体何故急に隠居などと仰るのですか？お身体はまだご健在のほうです。隠居するにはまだ早すぎるのではないのでしょうか？」
子供の1人が口にした。確かに彼はまだ肉体的な衰えこそあるものの政務ができないほどではない。

いい加減なことをされては困る。この国にはまだまだ父の存在が必要なのだ。子供達や孫達はしきりにそう声をあげた。
すると、彼はこんなことを言ってきた。

「私自身本当に悪いと思っています。でも、何故かな。私に残された時間は少ない気がするんだ。最期の時ぐらい私は皇帝でも、天の御使いでもない1人の人間、北郷一刀でいたいのだ。本当にすまない。でもこれは私のわがままなのだ。生涯最後の、な」

そう言い残すと彼は隠居し、表舞台から姿を消した。
実際この言葉の通り数年後、彼の体は自由がきかなくなった。残された時間がだんだんとゆっくりだけれども少なくなっていくのを彼は感じた。

外では桜の花がひらひらと舞っている。それに呼応するかのよう
に時間の流れはゆっくりとしたものだった。数日前に咲いた桜。今では桜の花びらを見ながら時間をつぶすのが日課になっていた。

ぼんやりと桜を眺めていると突然ドアをノックする音が聞こえた。
「誰かな一体？今日は来客の予定はなかったはずだが？」
侍女であろうか？いや、今日は夕方に来てくれればいいと言っているはずだ。こんなに早く来るはずがない。
時間は午後の一時ごろ。確かに少し早すぎる気がする。

誰だろうと考えているとドアの向こうから声が聞こえてきた。

「おじい様、起きていらっしやいますか？」

「おお、起きているよ。入っていらつしやい」

ガチャという音と共に1人の20代くらいの若い女が入ってきた。ピンクの髪、褐色の肌、腰には南海霸王、少しきつい目をしている。見た目は彼女の祖母、蓮華にそっくりだ。彼女は彼の孫娘の1人であった。

「珍しいね。私のところを訪ねてくるなんて。一体どうしたんだい？」

彼が珍しく思ったのも無理はない。彼の今住んでいる場所は街の離れにあり何か用事がなければ誰も訪れてこないような場所である。来訪者はもっぱら小鳥などの小動物。人が訪れたのは侍女を除けば半年ぶりのことであった。そのため、今回の彼女の訪問に少しばかり驚いていた。

「はい、本日は蓮華おばあ様の命日だったので墓参りに行って参りました。今日はその報告に参ったのです」

蓮華そっくりの顔立ちでそんなことを言うものだから、まるで自分で自分の墓参りをしに行ったと言っているようでなんだかおかしかった。つつい微笑んでしまう自分がいることに彼は気づいた。

「どうしたのですか？何か笑っているようですか？」

変に笑われたので気になったのだろう。彼女は少し困り果てていた。

「いや、なんでもないよ。そうか、蓮華の墓参りか・・・」

彼女の墓参りなんか何年も行っていない。いや、彼女だけじゃない。誰の墓参りにもずつと行っていない。

彼とともに平和な世の中を築いた幾人も英雄は既にこの世にいない。三国時代を生きた彼女たちはこの平和な世の中を築くと、まるで役目を終えたかの様に1人また1人と姿を消していった。最後に残った蓮華も10年前に逝ってしまった。ただ自分1人だけが現世に残された。彼女たちがいなくなつてから、もういくつの夜を迎えたのだろう。夜が来る度に思い知らされる。自分がただ1人この世界に残されたという事実を。墓参りも行くのをやめた。怖かった

のだ。その事実を認めてしまうのが。

「それにしても早いものですね。もう桜が咲いているなんて。今年はずかだったので、早めに咲くのだろうと思っていたのですが。まさかこんなに早いとは」

「そうだね。今年はずかよりもより早い開花だね」

「ついこの間まで冬だと思っていたのに」

「時というのは人が思っているより早く進むように出来ているんだよ。気づいたらあつという間だ」

この桜の木も昔はまだ小さなものだった。時々、政務をサボってこの場所に来てはこの桜の成長を眺めていた。成長自体はゆっくりとしたものだった。でも確実に桜は大きくなっていった。子供たちが成長するのと同じようにこの桜も大きくなっていった。

不思議な魅力を持っている桜だった。ここに来ればなんだか彼女たちに会えるような気がした。今は亡き彼女たちの面影をこの桜は持っているような気がしたのだ。亡くなった彼女たちの魂がこの桜の木に入り込んでいるような錯覚まで起こすくらいだ。だから、隠居する時ここに屋敷を建ててもらった。いつでもこの桜の木を眺めていられるように。いつでも彼女たちに会えるように。

「おじい様の言うとおりです。時間はあつという間に過ぎてしまふもの。おばあ様が亡くなってからももう十年も経ったんですもの。早いものですわ」

「うん。早いものだ本当に・・・」

蓮華が危篤の時。隣で彼女の手を握っていた。若い時ほどの美貌もなく、しわくちゃな顔でいた蓮華。

でも、しわくちゃなその顔はいつも笑顔で溢れていた。亡くなる時もその顔は笑顔でいて。なんだか幸せそうだった。蓮華だけじゃない。愛妙も星も、冥琳も霞も、最後の瞬間は皆笑顔だった。これから死ぬというのに、何故彼女達は笑っていられるのだろう。

「主、死は終わりではありません。次への扉を開く一つの契機にすぎないのです」

今でもあの言葉は心に残っている。

「おじい様、風が心地よいですね。」

窓からふいてきた風が部屋の中に流れ込んできた。

部屋の空気がなんだか暖かくなった気がした。

「確かに気持ちがいいね。こんな日は花見でもしたいものだ。」

「花見ですか。それもいいですね。お酒もまた美味しく吞めそうです。」

うきうきした顔で話す。そんな姿を見てみると、まだまだ子供なんだなと年寄りくさいことをつい思ってしまった。

「花見か。花見もいいけれど、夜桜というのもいいものだよ。」

「夜桜ですか？明かりがないのにどうやって桜を見るのです？」

「月明かりで見るのさ。夜の桜には昼の桜とはまた違った美しさがあるんだ。華琳も好きだったんだ。」

春の満月の晩はよく華琳に連れ出されたっけ。明日も早いってのにまるで言うこと聞いてくれなくて。普段は王様なんて言うって強がっていたけど、その時だけは少女みたいな顔で嬉しそうにして。その顔を見てたら冥琳や愛妙に怒られるのも気にならなかったな。

「華琳おばあ様ですか。厳しい方でしたねとても。私たちはあの方を見習えとよくお母様たちに言われたものです。」

「そういえば華琳はみんなのお手本によくされていたね。彼女もどことなくそれを感じていたよ。」

ある時彼女は言っていた。

「私は言葉で娘達を教育する気はないの。その代わりに私はその姿を、その背中を、彼女たちに見せていくわ。」

そんな父親みたいなことを言っていた華琳。まったく、それじゃ俺がいる意味がないじゃないか。苦笑いしながらそんなことを思っていたな。

自分がこの世界に来た意味は一体何なのか。この年になってもその意味を結局分かっていない。半世紀以上前、現代の東京からここに飛ばされてきて。何をすればいいかも分からずにただ一生懸命日

々を生きてきた。生きてきた分だけ過去がある。その過去を振り返ってみれば数々の選択肢がある。その選択が正しかったかは今でも時折考える。しかし、どんなに考えたところで意味はない。選択の時はもう去ったのだ。過去に戻って別の選択肢を選ぶことはできない。前を見続けるしかないのだ。

でも、時々どうしても後ろを振り返ってしまう時がある。天の御使いだなんだともてはやされていても、そういう人間的なところが彼にはある。そんな人間臭い所があるからこそ彼は変に勘違いせずここままで過ごしてこられたのかもしれない。

「部屋が暖かくなったらなんだか眠くなつたな。ひと眠りするよ。夕方には起こしてくれ」

そう一言だけ言うと彼は瞼を閉じた。

「夜桜か・・・」

どうやらその一言は彼女には届いていなかったようだった。

寒い。体に当たる風を感じ彼は目が覚めた。

「妙に部屋が寒いな。どうしたんだ？」

辺りを見回してみると窓が開いている。冷たい三月の夜風が流れ込んできている。

「あの子は窓を閉めていかなかったのか」

やれやれと思いつつながら彼は重い体を動かし窓を閉めた。

「閉めてつてくれてもよかったのに」

少し恨めしそうに呟く。

それにしても窓を閉めるのもこんなに大変とは。近頃は変な咳も出るし体の調子はすこぶる良くない。この前も意識が遠のいたことがあったな。本格的にお迎えが来ているのかもしれない。

先日、侍女が見つつけていなければ彼は本当に死んでしまうところであった。彼の体は実際かなり限界まで来ていた。医者の話でもう長くはないという。

彼はそんなことはもちろん知らない。でもそこは自分の体のこと。どことなく死期を感じ取っていた。自分の命は残り少ない。この世にいられる時間は本当に少ない。

「それにしてもあの子はどこに行ったんだ？夕方には起こしてくれと言ったのに」

辺りを見回してみても彼女の姿はない。人の気配もないのでおそらく帰ってしまったのだろう。

そんな冷たい子ではなかったはずだが。それでも今の状況を見る限り間違いない彼女はこの屋敷にはいなかった。

「しょうがないなまったく」

ため息をつきながら彼はベッドに腰を下ろした。随分眠ってしまった気がしていたがまさか夜になっているとは。少し寝すぎてしまったか。久しぶりに彼女達の夢をみたからかもしれない。

遠い昔の思い出。まだみんながいた時代。二度と戻らない懐かしい過去の日々。時の流れのフィルターに通してみると全て遠い日の出来事として、あるものはぼやけ、あるものは純化されている。

それにしてもよく自分のような人間が皇帝なんてできたものだ。力があるわけでも、知勇に優れているわけでもない。そんな自分が皇帝なんて大層な役をこなせたのはひとえに妻や子ども、孫達の支えがあったからだと思う。

今考えてみれば自分は決して出来のいい夫でも、父親でもなかった。子ども達には偉大な母がいたし、孫達には偉大なる祖母に母という子ども達よりもっと贅沢な環境があった。

武勇にしても知勇にしても、この国最高峰の彼女達に育てられた子どもや孫達は皆優秀でまた豪胆な子に育った。そんななか、自分にできることと言えばいいことをしたら褒めてあげる、悪いことをしたら叱るといふなんとも平凡なことしかなかった。そんな自分に無意識なコンプレックスを持っていた。

「今日は満月か」

夜空には満月が昇っている。窓から月の光が部屋の中に注ぎこまれていた。

部屋の中は何とも言えない空間が広がっている。静寂の世界とでも言うのだろうか、言葉にするのが難しい。言葉にはできなかったが、この空間が嫌ではなかった。だがそんな世界も唐突に終わりを告げることになる。

「おじい様！」

勢いよくドアが開いたかと思うと彼女が入ってきた。

「いきなりどうしたんだ？その前にお前はどこにいたんだね？」

「そんなことはいいいから私と共に来てください。準備ができました」

「準備？一体何の準備かね？」

「もちろん夜桜のです」

そう言うと彼女は彼を強引に車イスに乗せ連れ去ってしまった。

馬車に乗せられ、連れてこられたのは昔自分が住んでいた宮殿だった。三国の都、その都の中心。それが正にここなのだ。この国に繁栄を、という思いで造られたこの宮殿は50年以上経った今でもほとんどいゝあせていない。職人達による思いがこの宮殿には込められていた。

「人払いは済ませました。どうぞこちらへ」

正門を抜け石畳の庭園を歩く。正確に言えば車イスでだが。庭園の至る所に桜の木が植えてあり、桜の街道というのにふさわしい。彼が連れてこられたのはその桜並木の中にある小さな休憩所だった。

「急に何だねまったく。いきなり夜桜なんて……」

「いいではありませんか。夜桜の話をした日がちょうど満月、これも何かの縁。思い立ったが吉日、運命とでも言いましょうか。とにかくやりましょう」

姿かたちは似ていても、この元気なところは似ていないな。どちらかと言えば雪蓮に似ているのかなこの子は。

陽気に話すこの子をみて一刀は思った。

「まあそれもいいか。酒はあるかね」

せつかくここまで来たんだ。楽しまなきゃ損だなこれは。それにとまにはこうやって見るのも悪くないだろう。

盃を渡され酒が注がれていく。聞かなくてもわかる。この酒は自分が好きな酒だ。

「うん、おいしい。去年は不作気味だったのではないのかね」

「ええ、確かに。ですが、そこまで不作というわけでもなかったのでもあまり影響はありませんでした」

「そうか、ならよかった」

ほっと一息をつき、盃を置く。隠居した身であるがいまだに、こいうことを聞いてしまうのは、おそらく体が覚えてしまっているからだろう。それだけ言うと彼は何も話さなくなった。

どこか遠い目で月を見ている一刀。その目はどこか悲しげで、ど

こが寂しげであった。

何か話そうか。彼女は思った。せっかく普段はひきこもっている祖父をこうやって連れ出せたのだ。こういう時ぐらいいっぱい話をしたい。そう思い、口を開きかけた。しかし、先に口を開いたのは彼女の方だった。

「お前のおばあさん達は幸せだったと思うかい？」

いきなりの質問に驚いた。まさか、そんなことを聞かれるとは思わなかったからだ。

「いきなりすまないね。少し前から聞こうとは思っていたんだが、なかなか聞けなくてね。久しぶりにここまで来たからつい聞いておきたいと思ってしまったんだ」

苦笑いする一刀。その笑顔は昔から少しも変わっていない。

「おじい様・・・」

「お前たちのおじいさんはどうにもそここのところ自信がなくてね。いい夫でもなかったし、いい父親でもなかった。そんな私の元にした彼女たちが本当に幸せだったのか私にはわからないんだ」

自分が苦勞している時、苦しい時、いつも彼女たちはそばにいて微笑みかけてくれた。貴方なら大丈夫と言ってくれた。それが、どれだけ自分の支えになったか。長い年月の中で、彼女たちと過ごしていけばいくほど彼女たちの存在がどんどん大きくなっていく。自分にとってなくてならない存在になっていたのは明白だった。では、自分はどれだけ彼女たちの支えになっていられたのだろう。自分がいなくても彼女たちは充分やっていける。それは既に歴史が証明済みだ。もしかして自分はこの世界に来る必要はなかったんじゃないだろうか。この世界に来て彼女たちと出逢って自分はよかった。なら、彼女たちは？本当に自分と出逢ってよかったと思っていてくれたのだろうか。こんな何も持っていない自分と出逢って。

彼女たちの愛情が深さが、自分の自信をなくさせていた。もらってばかりいる自分がなんだかすごく情けなくなつた。こんなにもらっているのに彼女たちには何も返すことができない。なんでもいい

から彼女たちの愛情に応えなかった。でも、結局応えられなかった。返すことができないまま彼女たちは逝ってしまったから。

「どう思う？ 私は彼女たちは幸せだったと信じている。いや、信じていたい。だが、それが本当かどうかわからないんだ」

何か適当な言葉で濁せるものではない、直感的に彼女はそう思った。だから、本心で話そうと思った。嘘偽りなく話そうと思った。

「私はおばあ様達ではありませんから幸せだったかどうかなんてわかりません。あまり長い時間一緒にいられた訳でもありませんし、もしかしたら、幸せではなかったかもしれない。でも、おばあ様達は幸せだったのではないのでしょうか。そうでなければ、亡くなる時まで笑顔でなんかいられませんよ。桃香おばあ様なんて満面の笑みでいらしたではありませんか。」

桃香の幸せでしたという言葉を彼女は今でも覚えている。にこにこしながらその言葉を口にしていた桃香。そんな彼女が幸せでなかったはずがない。

「それに、おじい様は自分がいい父親でなかった、と仰っています。私にはそうは思いません。お母様・おばあ様達が武人・王としての道をお教えくださったのだとしたら、私たちはおじい様から人の道をお教えしていただいたのではないのでしょうか。人として当たり前のこと。これができている人は多くはありません。私たちは人としての道を教えていただいたからこそ、王としてまた人の上に立つ者として誤った道を進むことなくやってこれたのでしょうか。私たちは幸せ者です。世界で一番偉大なおじい様の下で育つことができたのですから」

段々言っていくうちに瞳から涙が流れ出てきた。どんな言葉よりも大きな、感謝の涙だった。

そして、涙を流していたのは彼女だけではなかった。

「そうか。そうか。そう……か……」

大粒の涙が流れ出てきていた。その涙はとどまることを知らない長江の流れのようだ。

「幸せだったか・・・」
ずつと泣いていた。まるで少年のようにぼろぼろと。その涙が枯れることはなかった。

「年甲斐もなく泣いてしまったな。なんだか恥ずかしいよ」

「よいではありませんか。涙は人である証拠。決して恥ずかしいものではないですよ」

「それもそうだな。私も心が軽くなった気がするよ」

「なおさらよいではありませんか。泣くことも大事なんですよ」

「お前が言っていることは正しい気がするな。肩の力も抜けたよ。ありがとう」

「いえいえ、お安いご用です。私もおじい様に話せてよかったです。おじい様、おばあ様達が亡くなってから元気がないように見えただので」

「心配をかけたな。もうその心配はしなくていいぞ」

「それは無理です。おじい様だってもう結構なお歳なんですから。心配するなというのは土台無理な話です」

「いや、もう心配する必要はない。もう今の私にはお前を見ることすらできないのだから」

「何を仰ってるんですか私なら目の前にはありませんか」

「目の前？なんだかぼやけて何も見えないんだが。一体どうした

んだらうな」

ニコニコとした顔で話す。つられてこちらもついつい笑ってしま
う。

「おじい様もおかしなことを言いますねまったく。おじい様の冗
談なんて久しぶりです」

わかってている。だから余計なことは何も言わない。それでいいの
だ。悲しがつて何か言うことをこの人は好まない。ならば笑顔でい
よう。最後まで、笑っていよう。

「そうだね。泣いたせいaka久しぶりにすっきりした気持ちでいる
んだ。だから、こんな冗談も言えてしまっただらう」

変だな。最期の時だっというのに、溢れてくるのは悲しみじゃな
くて。嬉しさで。嫌なことたくさんあったのに頭の中に出てくる
のは楽しかった思い出ばかりで。ああ、そうか。だから君たちは最
期の瞬間^{とき}まで笑顔だったのか。ようやくわかったよ。君たちの笑顔
の意味が。

そして、感じる。これは終わりなどではなく、始まりであるとい
うことを。自分でもわからない何かが今まさに始まるうとしている。

「少し眠るよ。今度はちゃんと起こしてくれ」

「はい、わかりました。おやすみなさいませ。おじい様」

「ああ、おやすみ」

とある村。

「ねえ、その貴女」

「何？あたしのこと？」

「そう貴女。ここの村の子？」

「うん、そうだよ。羅貫中って言うんだ。今年10歳になった大人の女だぞ」

「そう。大人の女ね・・・」

「あああ！馬鹿にすんなよ！おっぱいはまだ成長中なだけだから！」

「はいはい。で、羅貫中ちゃん。実はとっておきの御伽噺があるんだけど聞きたくない？」

「えー？知らない人のお話は聞いちゃだめだってお母さんが言ってたもん」

「私の名前は管路。都で有名な占い師よ。貴女も名前くらいは聞いたことがあるでしょう」

「あ、知ってるよ。よく大ボラふきとか言われてる人だ」

「・・・まあそんなことはどうでもいいわ。で、聞きたい？聞きたくない？」

「うーん・・・どうしよっかなあ」

「聞いて損はさせないわ」

「そうだなあ・・・じゃあちょっとだけね」

「きつと、ちよつとでは終わらなくなるはずよ。今からずっと昔のお話だね。その当時国は・・・」

「あー！」

「話の腰は折らないで欲しいわね」

「みてみて！流れ星だ！」

「流れ星、ね」

「綺麗だったね！私お願い事しちゃった。おっぱいが大きくなり
ますようにって！」

「ええ、ホントね。とても綺麗だったわ。そして、女の魅力はお
っぱいじゃないのよ。女の最大の魅力は太ももにあるの」

「そっか太ももか・・・よし、それじゃあ流れ星も見たことだし。
お話続けていいよ」

「今度は、ちゃんと聞いてもらいたいものね。今からずっと昔・
」

今再び、外史の扉が開かれる。

(後書き)

こんなつまらない文章を読んでくださりありがとうございます。
これで自分の中の恋姫は終わりです。

今度は何かオリジナルの小説でも書ければと思っています。

最後に感想などをいただけると幸いです。

ありがとうございました。

また都の条例が騒ぎ出しました。詳しいことは青少年健全育成条例
改正案でググっていただければわかると思います。こんな条例には
断固反対です。

「オタクは認知障害者」

「子供はホントにバカでどうしようもない」

こんな言葉を平気で言えるやつらが作った条例なんて自分は絶対認
めません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1343p/>

その後のお話～一刀、彼の場合～

2010年11月29日03時13分発行